



第126号

平成23年2月1日発行  
発行所  
長崎大学玉園同窓会  
〒850-0029  
長崎市八百屋町36番地  
☎095-824-5494  
発行人  
小川 天  
（株）昭 和 堂

言語力を育てる



玉園同窓会副会長 渡邊 洋子

「おしゃべりはするが、改まった場では、きちんと話すことができない。」という声をよく耳にします。また、「ことばのやりとりがうまくできなくて、暴力に走ってしまうケースが多くなっています。」という先生方の声もあります。さらに、「企業からいけばん言われることは、とにかく大学生の言語がなっておらず、コミュニケーション能力がないということだった。書き、話し、聞き、見る

ことが、高等教育を終えてもなされていないということだ。」という大学教授の話もあります。いま、児童生徒の「言語力の低下」が心配されています。一つは、コミュニケーション能力の低下、もう一つは、読む・書く・考える能力の低下です。考えていることはあるのに、それをうまく整理して伝えられないのです。人は、「ことば」によって自分の意志や思考を伝え、理解し合い、よい人間関係をつくっていきます。必要なときに、自分のことばで、きちんとものを言うことができます。話し合うことができる力を育てることが必要です。人類は、ことや文字を持つことによって、物事を認識し、思考し、伝達し合っ

てきたので

今日の文化を創り出してきたので  
すから。  
新学習指導要領では、各教科において基礎的・基本的な知識・技能を習得することを重視し、習得した知識・技能を活用して、思考力・判断力を育成するとしています。その基盤となるのは「言語に関する能力」であり、それは国語科だけでなく、各教科等において育成することを重視しています。

また、教育内容の主な改善事項に、まずあげられているのが「言語活動の充実」です。国語科をはじめ、各教科等で、記録・説明・討論など、ことばを使った学習活動を通して「ことばの力」を育てるということです。

児童生徒の言語活動に対する動機を高めるために、学校でできることを考えてみますと、  
○自分の思いを、思いきり表現できる機会を設定する  
○人の意見をよく聞いて、自分の意見を言うことができるように仕向ける  
○遊びや体験学習の中で、協力し、協働し、話し合うことにより、対話や討論の力を伸ばしていく  
○調べ学習の折、取材したメモを文章化し、聞く人にわかるよう

に発表する場を設ける  
など、実践的に学ぶ機会や場を作っていくことがあげられます。

ある幼稚園のPTAで講話をすませたあと、園長先生との話し合いの中でも、園児たちのことばの問題が出てきました。園では、ことばの指導の一環として、昼食時に水を与えるとき、「水。」と言っただけでは素通りし、「先生、お水。」とか、「お水、ください。」など二語以上で求められたときには与えているということでした。なんでもないことのようにですが、児童生徒も、大人でも「単語」で話が返ってくることが多い中、園での指導は大切なことと思われま

す。「一語」で話すのは幼児語の特徴です。家庭でも、幼児期から「ことばの芽」を大事に育てることが必要です。

二〇一〇年は「国民読書年」でした。一年間を通して「ことばの力と心をはぐくむ」、「読書力とコミュニケーション力」などの講演やシンポジウムが開かれました。

日本人の心の基盤である国語を大切にし、読書によってことばを学び、表現力を高め、感性を磨き、よりよく生きる力を育てていきたいものと考えているところです。

**主題**  
**「新学習指導要領の具現化に向けた  
 我が校の実践」**

各学校では、新学習指導要領の全面実施に向けた自校の教育課程の編成や、実施に向けた諸準備が整いつつあると思います。(中学校は次年度)

わたしたちには、「ゆとりと充実・学校週五日制・内容の厳選と時数の削減・総合的学習の時間」等の教育を見直し、これからの「知識基盤社会」といわれる時代を切り拓いていくための「生きる力の育成」が求められています。新学習指導要領の理念を明確にして、教育と学校の再生に向けた教育努力が問われていることの自覚が大切だと考えます。

本会報におきましても、本年度一年間(一一五号・一二六号)を通して標記主題を掲げ、最終年度(中学校は次年度)における、各学校の「具体的な改善内容」の取り組みを紹介し合い、全面実施に向けた研修を深めたいと考えました。

一一五号では、下記の学校にお願いしました。

島原第五小学校・小綱小学校では、「具体的な改善内容」であります「言語活動の充実」を目指した研究が進んでいます。西諫早中学校では、自校の課題や生徒の実態に即した学校暦・校務分掌・日課や週時程等の見直しが進められています。南有馬中学校では、道徳教育を根幹にすえた「規範意識や思いやる心の育成」を目指した教育実践に取り組んでいます。

これらのレポートを通して、四校が教育課程全体にわたる教育課題は何か、各教科等の実践課題は何かを明らかにし、新学習指導要領の理念である「生きる力の育成」を目指した具体的な方策・手立てを立案し取り組んでいる姿を確信できたものと思います。

一一六号においても、前号に引き続き、全面実施に向けた取り組みが進められている他の学校の現状を紹介し合い、研修を深めていきたいと考えました。

**地域の特性を生かした国際理解教育**

佐世保市立江上小学校長 犬塚隆弘



本校所在の江上地区は、戦後より米軍基地が建設され、校区である基地の内外に在日米国人が多数生活している。また、全国的にも有名なテーマパーク「ハウステンボス」もあり、中国や韓国など、海外からの観光客が多い国際色豊かな地域でもある。このため本校在籍の児童の中には、米軍住宅やハウステンボス内から登校している子もいる。

米軍基地内の「ダービースクール」とは、平成元年の姉妹校締結以来、相互交流や体験入学の受け入れを行い、国際理解教育や英語活動(外国語活動)に本校独自で取り組んでいる。

一 **国際理解教育の本校テーマ**  
 英語活動を含む国際理解教育を通し異文化に親しむことにより、国際的な広い視野を持ち、同時に、

自文化を振り返り再確認する。異なる文化や習慣を持った人々に対して偏見を持たずに、自ら積極的に発信できる異文化間コミュニケーション能力の基盤を作る。

二 **国際理解教育推進の概要**

○ 教育課程への国際理解教育の位置付け

校務分掌に国際理解教育担当を位置付け、全体計画及び年間計画を作成し取り組んでいる。現在、活動の中心は三年生であるが、四年生や、特に五・六年生は外国語活動とも関連を図り、発達段階に応じた、系統性ある年間計画の見直しに着手している。

○ 総合的な学習の時間での取り組み

三年生は年間三十時間程度をダービースクールとの交流学习に費やし、そのほとんどに県立大学の先生や学生さん方をゲストティーチャーとして迎え、簡単な英語活動を含めた、特にアメリカの文化について理解を深めている。これをふまえた、ダービースクールとの実質的交流会は年間二回で、

互いの学校を訪問し合う形をとっている。児童は相互に、学校探検を行ったり、独自の文化や伝統を伝え合ったり、互いの日常的な食事を体験したりする。

また本活動の運営面では、保護者や地域ボランティアの協力を得ている。

○ 体験入学の受け入れ

ダービースクールが夏休み期間中の一か月間程実施している。体験希望者は毎年十名程度であり、全学年を対象としている。言葉は通じなくとも、身振り手振り等によるコミュニケーションが自然と図られ、異文化理解・他者理解の教育活動につながっている。

○ 中国修学旅行団との交流

ハウステンボスへの中国修学旅行生との交流を定期的の実施している。交流学年は主に高学年である。互いに歌や合奏を披露したり、集団ゲームや遊び等を行ったりすることを通して、親睦を深め合っている。

三 校長としての今後の主な関わり

本教育活動において、児童の発達段階を考慮し、学習内容に系統性をもたせることへの有用性について、教職員の意識を一層深める。その一方策として、これまで以上の県立大学とのタイアップにより、

外国語活動を含めた国際理解教育への校内研修を充実させる。併せて、英語力のスキルアップを図り、抵抗感なく授業実践できる教職員の資質向上をめざす研修としていく。

また、本教育活動の効果を高め、

## 二学期制と午前中五時間授業日の設定

大村市立福重小学校長 今道 孝志



福重小学校は大村市の北部の田園地帯に位置する。児童数三百名、十一学級（五年生のみ一クラス）の学校である。

近年は「フルーツの里」福重というキャッチフレーズで御存じの方も多いのではなからうか。学校の周りにも梨園やブドウ園の棚が多く見られる。自然が豊かで学校の周りの水路にもクロメダカがすいすい泳いでいる。本校でも五年生が元PTA会長さんの田んぼで稲作を体験させていただいている。

拡げるマンパワー確保には、育友会や地域ボランティア等との連携が不可欠である。組織として、関係者や外部諸機関と円滑な交渉が図れるよう、特に人間関係・つながりに関わる環境や条件づくりを精力的に推進していきたい。

子どもたちは純朴で素直である。保護者や地域の皆さんも大変協力的で、環境整備はもちろん、授業参観の出席率も毎回八割を超えている。職員も子どものためなら苦労を厭わぬという姿勢で取り組んでいる。校長としては恵まれた環境に感謝している。

大村市も財政再建中の苦しい中、ネイティブのALTを年間三十日ほど派遣するなど、学校への支援をしていただいている。今年度も五・六年生は外国語活動を三十五時間実施している。本校は八月から新しいALTにかわった。ALTは初めての経験だが、昼休みは子どもと一緒に汗を流して遊んでいる。まだ日本語がよく通じない。だからこそ、職員は事前に念入り

な打ち合わせを希望し、担任主導で授業を仕組んでいる。

また、本市では十八年度から二学期制を実施している。趣旨は、「子どもたち一人一人に生きる力を身につけさせるためには、(中略)今以上に子どもたちにとって時間的・精神的にゆとりのある学習環境を整備し、個に応じた指導と支援が必要になってくる。その実現への一つの手段として、二学期制を導入し円滑な教育課程の推進と子どもたちのための特色ある学校作りを推進する。」というものである。その結果、夏季休業は、学期の節目から形成的評価・個別の指導・修正の場というとらえ方をしている。通知表は休業前にはないので、そのかわり休業日に入る前後に全保護者等との個別の面談や休業日に入ってから補習指導を実施している。

一方、指導時数の増加と勤務時間の短縮は、教師の多忙感を増幅し、児童とのふれあいの時間を圧迫している。その解消策の一つとして、「午前中五時間授業日」の設定を試行した。四月のPTA総会で説明し、五月から実施している。前期は十三日設定した。その内訳は、個別指導・教材研究・面談が六日、校内研究五日その他の

会議が二日である。今年度は、研究発表会を十一月末に控えているので校内研究の回数が多めになっている。その結果、「課業日も放課後の個別指導がしやすくなった。」「もう一日増やしてもよい。」等の意見が出され、当初のねらいは達成できたようである。

一方授業の間が五分に縮まったため、特に特別教室への移動が大変だったとの反省も当然なことである。

り多くの時間を活用すると共に、特別教室への移動や学習意欲の継続を考慮した時間割の工夫で対応していきたい。個別指導・教育相談・行事の準備・集団遊び等に活用することで、教師・児童双方に「時間的・精神的にゆとりのある学習環境」を提供できることを目指している。

大村市の施策を活用しつつ、新教育課程の趣旨を具現化すると共に、本校だからできる取り組みにしていきたい。

## 新学習指導要領への円滑な移行のために

長崎市立神浦中学校長 藤野 卓郎



長崎市立神浦中学校は、現在、全校生徒三十四名と、長崎市立の四十校の中学校のうち、六番目に生徒数の少ない学校です。

西彼杵半島の中西部、旧外海町神浦に位置しており、平成十七年一月には、市町村合併により、長

崎市に編入されています。

過去には、昭和六十二年から、十数年間にわたって「国際理解教育」の研究校として、実践を積み重ねてきた歴史があります。

生徒会の専門部として「国際文化部」という名称が残っていたり、資料等を収納する部屋として「国際資料室」という名称の教室が残っていたりと、校内の至る所に、当時の実践の成果が残っています。

しかしながら、現在、これまで

の研究の成果が十分継承されておらず、地域の教育資源が校内の教育活動に十分生かされていないという現状があります。

わたし自身は、本校に赴任して二年目になりますが、新学習指導要領への移行を円滑に行うために新学習指導要領の趣旨を生かした教育活動の実現に向けて、以下の三点を中心に取り組みを進めていくところ です。

一 「確かな学力」の定着に関すること

二 「総合的な学習の時間」の見直しに関すること

三 新学習指導要領への移行を円滑に行うこと

一点目に関しては、どの学校でも実践されていることと思いが、校内研修の中で、「学力向上」と教師の「指導力の向上」を図るための取り組みを行っています。

具体的には、授業研究や部会を設定しての校内研修です。そうした取り組みの中から、部会の取り組みとして、生徒の学習意欲の向上や家庭学習の習慣化を図るため、各教科の家庭学習の仕方をまとめ「自学のしるべ」を作成し、教科指導や学級指導の中で活用しています。

また、放課後や長期休業中の補

充学習にも取り組んでいます。

二点目に関しては、「総合的な学習の時間」は、「各教科等で習得した知識・技能を相互に関連付けながら解決するといった探究活動」を行う機会として、新学習指導要領でも重視されています。

しかしながら、時数に関しては、現行よりも大幅に削減されていますので、全体計画や年間指導計画等の見直しが必要になってきます。

本校では、前述のような校内の現状をふまえて、「国際理解教育」を中心に据え、地域の教育資源を生かした教育活動が展開できないかと考えているところです。

三点目に関しては、平成二十四年度からの完全実施に向けて、平成二十三年度一年間、移行のための準備期間が残されています。したがって、来年度、一年間をかけて、準備を怠らないようにしていきたいと考えています。

特に、教科指導においては、学習内容等の変更点に関して、指導する教師自身がしっかりと理解していることが不可欠です。

過去には、学習指導要領の内容等に関して、未履修の問題が話題となりました。そうしたことが起こらないよう、年間指導計画の作成や授業の実施に際して、十分配

慮しなければならぬと考えています。

また、現在、本校では、取り組みが十分進んでいるとはいえない「言語活動の充実」に関しても、

先進校の実践事例等を参考にしながら、校内研修等で取り上げるなどして、学校全体で取り組んでいきたいと考えています。

## 体験活動の充実と「確かな学力」の定着を目指して

東彼杵町立彼杵中学校長 有田 洋史



中学校における新学習指導要領の完全実施が一年後に迫ってきた。本校では、先行実施の内容を含めて移行期間中に種々の取り組みを行っているが、ここでは、地域における体験活動と基礎学力向上の取り組みの現状について紹介したいと思います。

### 一 地域と結びついた体験活動の推進

本校では、一年生での職場体験学習(三日間)、二年生での茶業体験学習(二日間)、三年生での異世代交流体験学習(三日間)を、

参加者も多く、中にはチェックポ

イントや安全確保のための監察・誘導などの役割を、ほとんど保護者が担当してくださる。これも保護者・地域の協力なしにはできない活動である。こうした取り組みを通して、規範意識や思いやりなどの道徳性の育成、発達段階に応じた体験活動の充実、家庭や地域との連携の推進が深まってきているように思う。

### 二 「確かな学力」の定着を目指す取り組み

今回の学習指導要領の改訂で示された「確かな学力」を身に付けさせるために、新たな視点での「基礎学力向上プラン」を検討し、次の三点を柱とした取り組みを進めている。

#### ①「わかる授業」の実践と基礎・基本の徹底

数学でのT Tや少人数指導に加え、理解が遅れがち、休みがちな生徒には、放課後に個別指導を行っている。また、パソコンや電子黒板等の情報機器の活用により、個に応じた教材提示や資料開発を進めるとともに、「学習規律の確立」にも努めている。

#### ②「国語力」の向上

学校図書館の計画的な活用とともに、毎朝の十分間読書を中心とした「読書活動の充実」、全教育

活動における「文章表現力・思考力の育成」に力を入れている。特に、「書く」とを通して考えたりに伝えたりする学習を大切にしている。その成果は、地域の各種行事での実践発表、弁論大会や様々な作文コンクール等での入賞、新聞等への作品掲載など、着実に現れてきている。また、言語活動を充実させる取り組みの柱ともなっている。

#### ③家庭学習の充実

生徒の自主的、自発的な学習を促すために、「自学ノート」という家庭学習帳を用い、毎日一ページ以上の家庭学習をして翌朝提出させる取り組みが続いている。個人によって量や内容は異なるが、ほぼ全員が提出しているのが、家庭学習の習慣化につながっている。また、生徒自らが委員会活動として自作問題による五十問テスト(一学期は社会、二学期は英語)を実施するなど、学習への意識も高まってきている。

以上紹介した取り組みを含めて、新学習指導要領の趣旨をふまえた本校の実践課題をさらに明確にし、その改善を図る中で、一年後の完全実施を迎えようと思う。

# わたしの教育実践

## 出会いに感謝して

長崎市立大園小学校 野茂大樹



今年で教職十年目を迎える。年月が過ぎるのを早く感じると共にこれまでの出会いに感謝して共に出会いがあるからこそ教育は変化し続けるものだ。わたしは考える。教育に携わる者として子どもとの出会いはかけがえのないものである。だから子どもと向き合う一分一秒を真剣に全力で取り組んでいる。子どもたちはわたしの表情、声色、動き：など全てを見ていて。そのことが分らず自分の思いばかりを押しつけている時期があった。すると子どもとの会話が少なくなり、違和感を感じるようになった。それは子どもたちも同じで、もう少し温かく見守ってほしいという合図だった。時には熱い思いも大切であるが、子どもたちが待っているのはいつも見守っているという安心感だった。こうして子どもとの出会いがなければわたしは教師としての成長はなかっただろう。

また、偉大なる先輩教師との出会いにも感謝している。仕事をす

る上で忘れてはならないことが常に貪欲であることだ。それを教えていただいたのは、魅力あふれる尊敬できる先輩教師だった。

どの仕事でも同じだが迷い悩み深みにはまっけていくことがたくさんある。学校行事や研究・保護者への対応、課外クラブの指導など答えが確定しているものは一つもない。

ある学校行事の計画立案をしていたわたしは、大切にしたい要素がありすぎてまとまりのない計画に悩んでいた。そんな時、「子どももあつての全てだよ。」という先輩の助言で前進することができた。すぐに助言をするのではなく、長く見守りながらサポートし船を出してくれた。見守ってもらったからこそ信頼が生まれた子どもたちとの関係もこうありたいものである。教育の本質ではないかと思う毎日である。

最近、教育における不易と流行についてよく考える。流行は時代の流れを見極め、的確な指導力と柔軟な対応力を身に付けることだろう。不易とは出会いを通して教師と子どもが強い信頼関係でつながることではないかと思う。これからは一人一人の子どもの大切にして、一人一人の子どもを大切にできるような日々精進していきたい。

## 音楽を学級経営に生かして

佐世保市立江迎小学校 藤田ゆか



教職に就き、今年で二十年が過ぎようとしています。振り返ると様々な学級の担任を経験することができました。

一年から六年までの学級担任、音楽専科、特別支援学級担任。その中で一つ続けてきたことと言えば、音楽を学級経営に生かしてきたことです。音楽には、子どもや集団を変えるすばらしい力があると感じる事が数多くあります。自分自身の学生時代から続けてきた合唱経験をもとに、歌う喜びや仲間と一つの音楽を作り上げる充実感を味わわせたいという熱い思いをもって、日々の学級経営を行っています。

子どもの中には、音楽を苦手とする子もいます。しかし歌謡曲やアニメソングにはほとんどの子が興味を示します。特別支援の子は特に子ども番組の曲をとっても喜び

ます。小さい子どものような純粋な心をもっているからでしょう。そのような曲を生かして集会出し物にしたり、学級の歌にしたりすることで、音楽の楽しさを味わわせることができました。

わたしの「歌はずばらしいと思う思い」が伝わるのでしょうか。わたしが担任してきた子どもたちは、不思議と歌が好きで子どもたちが多く、いつも学校一の歌声を自慢することができました。

先日、PTA音楽祭に合唱団の一員として参加する機会があり、久しぶりに合唱の楽しさと充実感を味わうことができました。そこには、緊張感がありました。歌詞や音程を覚える努力がありました。仲間との協力や助け合い、終わった時の達成感、賞をもらった時の喜びもありました。合唱一つで様々なよさを体験することができ、これを改めて感じました。

これからも学級経営をしていく上で、音楽のもつ大きな力を生かし、学級、学校のみんなが一つになる瞬間をたくさん作っていきたくて考えています。

# 子どもの心に耳を傾け、師弟同行を通して

島原市立第一小学校 豊村 めぐみ



初任校である第一小学校に赴任して、早くも二年が過ぎようとしています。現在、明るく元気のいい四年生三十七名の担任として、日々悩みながらも楽しい毎日を送っています。そして今、改めて人を教える責任の重さと、教職に就くことができた喜びをかみしめています。

本校は島原半島でも屈指の伝統校であり、教育の基盤に「心の鏡を磨く教育」を掲げ、全職員が一丸となって教育活動にあたっています。そこで、わたしも自分自身の「心の鏡」を磨くために、二つの誓いを立てました。

一つ目は、「子どもの話を目を見て表情豊かにじっくり聴くこと」とです。「聴く」ということは簡単そうで、とても難しいものです。仕事の要領が悪く、多忙な毎日を送っているわたしにとってはなおさらです。子どもの話を聴けなかった時には、子どもの表情が曇ります。しかし、聴いてあげら

れた時には、満面の笑みを見せてくれます。わたしは、子どもの本音や悩み、心の葛藤にしっかりと耳を傾けることのできる教師でありたいです。そして、子ども一人ひとりを理解し、認め、褒め、励まし、共感しながら、子どもの居場所を作ってあげたいと思います。

二つ目は、「率先垂範・師弟同行」です。教育とは、子どもを教えることだけではありません。教師自身も常に向上心を持ち、子どもたちの先頭に立っている必要があることに挑戦する情熱や芯の強さが必要で、時には、挑戦してもうまくできないこともあります。それでも、一緒に頑張って頑張り続ければ、子どもたちは必ず認めてくれます。「子どもの姿は大人の姿」とよく言われます。子どもに「しなさい」と言う前に、自分自身が率先して動き、何事にも挑戦し続ける教師でありたいです。

教師という教える立場でありながら、子どもたちからたくさん教えることを教えてもらった、実りの多い二年間でした。そして、これからも学びの日々は続いていきます。自分自身の「心の鏡」を磨くために、初心を忘れず、三十七名の「ダイヤの原石」がさらに輝きを放つよう、日々努力していきたいと思えます。

# 「学ぶ、楽しむ」

西海市立西海東小学校 松下 由季奈



学校の先生になって二年生になりました。まだまだ経験は浅いですが、現在大切に行っていることを二つ紹介します。

一つ目は、学ぶ姿勢を忘れないことです。

初任者としての一年目は、ひたすら目の前の仕事や研修をこなしていく日々でした。その中で、ノートに記録することを先輩の先生に教わり、着任した日から仕事や授業の反省などを記録していきまし。ノートを見て仕事を振り返ったり、授業に生かしたりしています。そのノートも五冊目になりました。今では、わからないことは積極的に先輩の先生方に尋ねたり、指導の様子を見たり、教室をのぞかせてもらうことが日課になっています。周りの先生方や自分の実践から学ぶ姿勢を持ち続け、子どもたちにとって良いと思うものは、

どんどん挑戦しています。

二つ目は、「楽しむ」ことです。

授業や校務など、どんな仕事でも楽しんで取り組んでいます。特に、授業では楽しいと思いつながら教えるように心がけています。そうすると、子どもたちも、「何が楽しいのかな?」「なるほど、楽しい!」と授業に興味を持ち、楽しんで学ぶようになりました。今担任をしている一年生は、自分の成長がわかった時が一番楽しいようです。それを生かして、子どもたちの成長が記録として残る教材作りやノート作りをするなど、子どもたちの立場でより楽しく学習できる活動を考えながら実践しています。わたしも子どもたちも学習を楽しむことで、よりよい学習の雰囲気づくりができました。また、授業だけでなく、教師としての仕事の一つ一つを、自分が成長していく階段として楽しむことで心に余裕を持つことができています。

一日一日を大切に教師の経験を積み重ね、自分の全てを子どもたちに還元できるように、これからも学ぶ姿勢と楽しむことを大事にしていきたいです。

## ペーロンと部活を通して

長崎市立深堀中学校 中 村 芳 勝



「ヨイサー、ヨイサー」。太鼓とドラのリズムに合わせて聞こえてくる勇ましいかけ声は、ペーロンを漕ぐときのかけ声です。わたしは勤務している長崎市立深堀中学校は、ペーロンが盛んな地域です。本校では、毎年七月下旬に行われている長崎ペーロン選手権大会に参加していますが、とにかく練習がきつい!!わたしも生徒と一緒にペーロンに乗って、櫂を合わせて漕ぎますが、片道と体力が持ちません。だから一本漕いだだけで、本当にくたくたになります。しかし、そんなきつい練習を通して、生徒たちとの距離も近づいていき、地域や保護者の方とも少しずつ信頼関係を築いていくことができました。生徒の中には学校生活で注意を受ける子もいましたが、叱咤激励しながら同じ時間を過ごし、同じ思いを共有することで、信頼関係を築いていけるとい

とを再確認することができました。また、部活動では女子ソフトボールを担当していますが、赴任した当初の態度には冷ややかなものがありました。だからこそ、わたしは毎日練習に参加し、積極的に同じ練習をこなしました。すると徐々に態度も変化していき、わたしが話すことばに真剣に耳を傾け、時には笑顔も見られるようになってきました。そして、三年目を迎えた昨年の十二月、西海市で行われた大会で見事優勝することができました。(十二月二十一日付の長崎新聞に掲載されました)優勝した瞬間、生徒の目には光るものがあり、わたしも胸が熱くなりました。入部して初めてボールを握り、グローブを手にはめ、バットを振った子どもたちが成し得た快挙に「やればできる」ということを改めて教えてもらいました。生徒と一緒に多くの時間を過ごし、信頼関係を築くことができないときもあるかもしれません。それでもわたしは、これからは生徒と共に一生懸命に取り組んでいくという姿勢を忘れず、努力していきたいと思えます。

## 体育なんか大嫌い

佐世保市立小佐々中学校 奥土居 篤



今年の正月、妻の実家に年始のあいさつに伺った折に、自分の中学生時代の話で盛り上がりましてそこで義母と義妹が、「体育は大嫌いだった。特に集団の競技が。」と言ったのです。正月の席でわたしは真面目に考え込むことになりました。一般的によく運動は「身体に良い」とか、「気分転換になる」など、前向きにとらえられることが多いです。また、教える側にも同じような考えがありがちで、「みんなで仲良く楽しんでいられるはずだ」という思い込みが生じやすいのではないかと思うのです。しかし、実際体育では、自分のプレーの成功や失敗の全てが見られてしまいます。次からも充実した活動をする事ができます。しかしどうしてもうまくいかない場合もあるのです。「スペースを見つけて

そこに動けばいいんだよ。」と言われても、スペースを見つけても、そこに動くこともとても難しいことなのです。やる気を失い、負のスパイラルで体育が嫌いになる可能性があります。ではわたしたちは何を大切にすべきなのでしょう。わたしは、「自分が経験したことがない状況や心情をいかに推察するか」だと思います。我慢をするわけではなく、わたしは体育が好きであり得意でもあります。できなかった経験よりできた経験の方が多いためです。だからこそ自分が経験したことのない状況や心境を全力で推察するのです。なぜ跳び箱が跳べないのか。なぜボールが取れないのかを。前任校で、ある生徒がこんなことを言ってくれました。「体育は嫌いでしたけど、先生のおかげで少し好きになりました」と。能力が高い生徒をもっと上のレベルまで成長させることも重要な役割ですが、そういった生徒を含め、「彼等が感じ求めていること」を敏感に感じ対応できる教師でありたいです。



# 母校だより

日并 正 嗣

## 教職大学院の

## 充実へ向けて

長崎大学教育学部長 山路 裕昭

平成二十年四月にスタートした教職大学院（教育学研究科教職実践専攻）は、三年目を終えようとしています。ここでは、この教職大学院の現状と今後の発展・充実について述べさせていただきます。

### （1）教職大学院の発足

「教職大学院」制度は、近年の子どもたちと学校が抱えるさまざまな複雑で多様化する課題に対して、より高度の専門性と豊かな人間性・社会性を備えた優れた教員を養成するために、「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（平成十八年七月十一日中央教育審議会答申）で提言されたものです。

高度専門職業人を養成する教職大学院では、次の二つの具体的な目的・機能が期待されました。  
○学部卒業生がさらにより実践的な指導力を備え、新しい学校づ

くりの有力な一員となり得る新  
人教員の養成。

○現職教員を対象に、確かな指導理論と優れた実践力・応用力を備えたスクールリーダー（中核的・指導的な役割を担う教員）の養成。

このような教職大学院は、また、優れた教員養成のモデルを示すことで、学部段階及び修士課程など他の教職課程に対して影響を及ぼすことも期待されています。

そして平成二十年度、全国で十九名の教職大学院（入学定員七百六十九名）が発足し、九州では宮崎大学と長崎大学に設置されました。（その後、九州では、福岡教育大学にも教職大学院が設置されました。）

### （2）教職大学院の特徴

教職大学院を修了すると「教職修士（専門職）」が授与され、「専修免許状」を取得することができます。しかし、従来の修士課程と異なっている点は、第一に、修了のための修士論文が不要なことです。

これは、学術的研究活動を主要な特徴としてきた従来の修士課程と教職大学院とが大きく異なることを示しています。

また、教職大学院では、標準で十単位の教育実習が必修とされており、専任教員には、高度な実務能力を備えた実務家教員を一定数以上含むことが求められています。

これらは、教職大学院が従来以上に実践的能力の向上に力点を置いていることを示しています。

さらに、長崎大学の教職大学院では、標準の二年コース以外に、現職教員を対象とした一年コース、教員免許状を持っていない人のための三年コースがあります。現在、二年コースでは二十六名、一年コースでは四名、三年コースでは九名の学生が学んでいます。

### （3）教職大学院の課題

発足から三年を終えようとしていますが、長崎大学の教職大学院には、解決しなければならぬ多くの課題も残されています。例えば次のようなものです。

#### ① 理論と実践の融合

教職大学院では、実務家教員と研究者教員との協働等によって、理論と実践とを融合し、さまざまな教育課題を解決し得る高度な実践能力を備えた教員の養成が求め

られています。この点に関して、実務家教員と研究者教員とが一緒になって院生を指導する場面を作ってきましたが、実務家教員と研究者教員との協力、協働体制はまだ十分ではありません。今後、運営面や、カリキュラム、教育方法においても、実務家教員と研究者教員との協働体制を一層確立し、理論と実践の融合を実現しなければなりません。

#### ② 教育実習の充実

教職大学院での教育実習は、教員免許状取得のための学部段階での教育実習とは異なり、個々の院生が、自らの課題を掲げて主体的に取り組むことを期待されています。

このような実習を充実させるためには、十分な指導と周囲の理解が必要です。そのため、実習の意義や狙いについて実習校の一層の理解を得ることは勿論ですが、特に実務家教員と研究者教員の双方が協力し、指導を充実させることが求められています。

#### ③ 学部教育との関係

また、今年度は合計十七の実習校で実習を行うことができましたが、院生の多様な課題に対応できるようにするためには、さらに実習校を増やす必要もあります。

教育学部の卒業生が教職大学院に入学して考えることを考えると、学部における教員養成も重要な問題です。場合によっては、学部から大学院までの一貫した教員養成を考える必要もあります。また、学部の教員養成においても実践的指導力の育成をこれまで以上に重視し、教職大学院におけるさまざまな試みを学部にも拡大していくことが求められています。

**(4) 教員養成、免許制度改革への対応**

既に周知のように、今後約十年間に、現在の教員の約三分の一が退職し、そのままでは経験不足の若い教員が大量に誕生すると同時に、経験豊かな中堅教員が少なくなる予想されています。このため、一方では実践的指導力、コミュニケーション力を身につけた新任教員が求められるとともに、他方では優れた実践力、指導力を身につけた中堅教員が求められています。

このような見通しの下で、中教審「教員の資質能力向上特別部会」の審議経過報告(案)では、教員養成は学部四年に加え一年から二年程度の修士レベルの課程等での学修を要すること(修士レベル化)について、今後検討を進め

るとされています。そして、教職としての高度な専門性の育成を図る教職大学院は、修士レベル化の主要な受け皿となることが想定されています。

中教審におけるこのような動きは、学部における教員養成の在り方や大学院における教員養成の在り方をあらためて見直すことを求めています。これは、前述の教職大学院と学部教育との関係にもかかわる問題です。

勿論、現在の政治、経済の状況では、今後の教員養成や免許制度改革を自信を持って予測することは困難です。

しかし、既に長崎大学教育学部は「教員養成に特化する」ことを宣言し、平成二十年度から情報文化教育課程(新課程)の募集を止め、教職大学院を設置しました。

中教審の行方に注目しながらも、今後私たちは、教職大学院の充実を図り、学部から教職大学院までの教員養成の力を高め、優れた実践的指導力を持つ教員を養成することに向かって一層努力しなければならぬと考えています。

**「平和と多文化共生」の教育の発展を。感謝をこめて。**

国際文化講座(社会科学教育) 教授 舟越 耿一



本年度、最後の卒業生を送り出す情報文化教育課程クロスカルチャーコースをつくるに際して、あれこれ議論して、「平和学」「長崎学」という授業科目を誕生させました。そしてこの方向性は、二〇〇三年の平和と多文化共生に関する教育研究センター(平和多文化センター)の設立へと発展しました。当時作成したパンフレットには設立趣旨が以下のようにあります。

「長崎の歴史と文化は、他に例を見ない『平和と多文化共生』の土壌を形成しています。センターは、長崎のこの歴史的・精神的土壌に着目し、これを系統的に学習・研究し、ここからさらに豊かな『平和と多文化共生』のメッセージ

を発信することを目的に設立されました」

新しいメッセージとしては、高橋・舟越編『ナガサキから平和学する』(法律文化社、二〇〇九年)をあげることが出来ます。スマタナの交響詩「マイカントリー」のような熱い作品になっているのではないかと自負しています。

また平和多文化センターの活動目標のひとつに「平和と多文化共生の教育と発信ができる教員の養成」があり、これの具体化として「STEP(アイ・ステップ)」と呼ばれるものが育ってきました。長崎大学教育学部と韓国の漢陽(ハニャン)大学教師範大学との交流プログラム「International Student Teachers Exchange Program」として、二〇〇三年に締結された「長崎大学と漢陽大学校との間の学術交流協定書」と、二〇〇四年に締結された「学生交流の細則に関する協約書」に基づいて行われ、長崎とソウルで隔年開講される単位互換の集中講義(二単位)です。本学部の授業科目名を、長崎開催は「平和多文化教育論a」、ソウル開催は「平和多文化教育論b」としてきました。本学部のこの試みは、一九九六年中教審答申が打ち出した「教育

の国際化」「国際理解教育の充実」、さらには総合的な学習の時間の例示として冒頭に挙げられた「国際理解」に対応するものでした。小学校教育コース多文化理解実践専攻の昨年の新入生のなかに「韓国に行けるから入学しました」という学生がいて大変喜んだものでした。

有意義な仕事をさせていただき、ありがとうございます。ますますの発展を心から期待しています。

### 初心者指導の

### 成果が出た四年間

芸術表現講座(音楽教育)

准教授 田中 邦夫



昭和四十三年国立音楽大学卒業後、長崎県公立学校教員として富

江高校赴任、また長崎国体の音楽指導員も兼ね教師生活が始まった。

約三十八年間に、高校の音楽教師として務め退職したが、最後に勤務していた長崎北高校オーケスト

ラ部が全国大会に出場するので指揮者がいないと困ると言われ、一年間、常勤講師として勤務した。これでゆつくりできると思ってい

たら、三月二十日過ぎに長崎大学から話が有り、おまけに附属中学校も兼任してくれと頼まれた。

とくに附属中は県下の名だたる精鋭教師の集まりで、誇りをもって仕事に打ち込んでいる。六十二

歳の私が体力的についていけないのだろうかと心配したが、皆さんに協力して頂いた。先生方は仕事熱

心で夜の九時、十時は当たり前であつた。授業は比較的音楽レベルの高い生徒が多かつたのである

が、公立小学校から来た生徒は、逆にそうでもない生徒もいたので、音楽が嫌いにならないように心が

け指導した。おかげでコーラス部はNHK音楽コンクールで「金

賞」受賞、また吹奏楽部が創部となり私の専門が活かされ、特に吹

奏楽部では初心者指導に取り組み、二月には第一回の発表会を中

部講堂で行い、その年の県吹奏楽祭にも出場できた。

二年目からは大学での指導になり、最初に小学校教育コースのピ

アノの指導をした。ビックリしたのは入学時に音楽の試験がないので初心者も多く、また楽譜も読め

ない学生も数多く、中には音階を歌わせても音程が取れない学生もいたので毎日研究室で指導をした。すると日増しに音程が良くなった。また、ピアノも上手くなり、これ

までの音楽嫌いから一転して好きになり、なんと前期だけでバイエ

ルを修了してしまった学生もいた。後で聞いたのだが、両親とも小

学校の先生で娘の音楽嫌いを一番心配していたらしく、「長崎大学に行つて良かったね」と言われたら

しい。そこで私は腹を据え、徹底的に初心者指導に力を注ぐことにした。というのは、小学校教育に

おいて音楽は避けて通れない教科である。学力的には十分あるので、興味・関心を持たせ、テクニク

的な指導を明快に教えることでピアノを弾けると思った。このこと

は、元をたどれば長崎師範の頃から続いているのである。また音楽

専攻の授業では、これまで六回のウイーン旅行を基に、ウイーン音

楽を中心に講義が出来たことは自身の勉強にもなった。

最後の年の後期は経済学部の夜間主の講座を受け持つことになつた。以前に諫早高校定時制を五年

間持ったが、これで大学と高校の夜の授業を持ったのも何かの縁である。以上のように私は中学

校・特別支援学校(諫早養護学校)・高等学校・大学の授業を受け持つという貴重な経験ができたことは教師冥利につきます。

最後に学生達に考えて欲しい。今だからいろんな勉強ができるのです。幅広い世界観をもって、海外視察などの経験もして下さい。

朝長昌三先生は、都合により寄稿頂けませんでしたので、経歴のみ掲載いたします。

人間発達講座(教育心理)

教授 朝長 昌三

昭和五十年四月

九州大学文学部助手

昭和五十四年四月

東筑紫短期大学保育科講師

昭和六十一年四月

長崎大学教養部助教授

平成九年十月

長崎大学教育学部助教授

平成十四年四月

長崎大学教育学部教授

平成二十三年三月

長崎大学教育学部定年退職

# おたっぴやだより

## 愚生断片

東京都大田区 瑞秀 政裕

(昭和二十四年卒)



この度、会報一二六号「おたっぴやだより」に寄稿の機会を得てその光栄にまず感謝申し上げます。わたしは長崎師範昭和二十四年卒で、既に退職後二十年を経たが、なりゆきで現在、東京玉園同窓会事務局をお預りしている。これまで会員の方々には無理押しで投稿依頼をお願いしたので、罪滅ぼしに一度は責めを果たしたいと思つた事である。駄文をお許し戴きた

昔の大村聯隊跡で師範本科生活を過ごしたが、一昨年師範同期会錦会で卒業以来のその地を訪問し門前の大きな蘇鉄に再会して往時を懐かしくもほろ苦くも思つた。どうか師範を卒業し、島原五小が教職のスタートであった。あの雲仙普賢岳の火砕流災害場面では、すべてかつての学区区域であった。今も残る埋もれた屋根姿を見て、被災された方々や地域に同情を寄せる。

師範時代に父が他界し、諸々の事情からわたしの流転人生が始まる。朝鮮戦争の頃は、四年間に横須賀市で二校お世話になった。大津小の学区に竜馬の妻の墓が残るとは、最近知つた事である。汐入小では教え子の家に多く特殊婦人がいた。当時の子どもは早熟であつた。環境の人への影響をまざまざと思つた。若さで毎日のように宿直したが、始業前の校内環境整備が大変であつた。基地にいなから英語は身につかなかつた。東京都教員を受ける。

試験前に離島希望と即採用を告げられたが、敢然と筆答等に挑戦。思えば、大田・品川・江東・中央の各区を巡り、教職四十二年間を夢中で勤め上げる。

最後は中央区の校長時代、現東京玉園武田公夫会長に出会い同窓の絆を実感する。

## お久しぶりです

福岡市城南区 神田 昌彰

(昭和三十四年卒)



昨日は京都市内、そして今日は奈良市内の種苗会社で年末のご挨拶と来年に備えての営業を終え、福岡に帰る新幹線の車中で原稿の下書きをしています。

わたしは現在、種苗会社から原種を預かり、中国の砂漠に近い甘肅省や青海省、昔の満州の遼寧省を中心に現地の農家に種子の生産を委託して、その種子を日本の種苗会社に納める会社に勤務しています。

種子の生産でも、単に種を蒔き育てて種を採るものから、品種間の交配により雑種を作り出すものまでいろいろで、出来た雑種の純度はDNA検査等で一〇〇%を求められることもある厳しい仕事です。

振り返れば、卒業後、十年余の教職生活を退き、三十五歳で実社

会へ飛び込んで見たものの、世間は厳しいものでした。「なぜ先生をお辞めになつたのですか」この話になると、なかなか理解して貰えず悪戦苦闘しました。手持ちの金は残り少なくなり、仕事を選んでいられる場合ではなく、深夜の新聞の輸送・車の陸送・贈答品の営業・ブリタニカの販売等々を続ける中、知人の薦めもあり、やつと保険会社の管理職を手にすることが出来ました。しかし、毎日毎日、仕事の連続で帰宅は深夜、おまけに転勤とくれば、子どもたちのためにも福岡での定着を考え、職場の企業を探すことを決意しました。知人の紹介もあり希望が叶い、地場の企業へ就職、バブルの波にも乗り、業績も順調、仕事も任され六十七歳まで頑張りました。退職後は、詩吟・尺八の教室通いを始めて数年後、今度は中国人経営の会社に招かれ、現役で頑張っています。

今後元気であれば八十歳まで頑張ろうと思つています。今、中国語の簡単なメールの送受信は何とかなるようになったので、次は会話が出来ようよう努力しようと思つています。後期高齢者だけども夢は大きく持ち続け、体力の維持に努め、仕事に、趣味にこれから頑張つて行きます。

## 現職続行五十二年の 歩みと省みることに

長崎玉成高等学校 鬼塚 謹吉  
(昭和三十四年卒)



「高等学校における特別支援教育」の取り組みを始めて二年目となる。文科省の研究指定を私学が受けるのも珍しいが、これを受けることにした理由は、公立学校三十八年間の教員生活への自省の念と贖罪の意味が大きい。

昭和三十四年上五島の小さな小學校を振り出しに、中学校二校を経て高校へ、高校でも工業・商業の実業系、県下唯一だった昼間二部制の定時制、加えて博物館勤務を含めて十二校を経験することができた。一校種でキャリアを積み専門性の高い指導力を持つ教師がいてもいいと思うし、わたしのよくな教職歴を持つものがないともいとも思う。

度も養護学校を体験できなかったことである。異動にあたって常に校長に一任し続けてきたので、最後の一枚だけでも養護学校にと希望を聞いてもらえばよかったと今でも思うことがある。

社会の免許しかない小学校の助教諭にとつて、全ての児童に算数を理解させることなど至難のことだったこと、どんなに成績優秀でも地元の高島に高校がないばかりに集団就職で送り出した生徒たち、初めての高校の分校で入試五科目の計が四十点台で受け入れた生徒、昼間二部の定時制では、中学校の調査書に数学・英語が評定不能と記載された生徒も入学させた。

この児童や生徒たちにどれほど本物の「学力・生きる力」をつけてやることでできたかの自省の念を持ち続けてきた。

本校では、心因性不登校だった生徒を初め、軽度の知的障害、発達障害や学習障害を抱えている生徒を相当数受け入れてきた。

この現況と本校の実学尊重の校風のもと平成二十一年度から普通科共育コースを設置し、生徒同士、生徒と教師、教師同士、さらには教師と親、親と子、親同士が共に育つていく学校を目指している。

## 楽しみは国際交流

諫早市役所 小松亜理沙  
(情報文化教育課程 平成二十一年卒)



社会人になり二年が経とうとしています。

クロスカルチャーコースの皆さん、中国ゼミの中島先生はじめ、皆さんお元気ですか。

クロスカルチャーの仲間たちはコース名の通り、旅好き、そして国際交流に積極的に取り組む仲間が多く、旅や留学に行く度に、土産話を楽しみにしていました。わたし自身も大学時代に行った海外旅行や国際交流が、今となっては貴重な経験となっています。

その中でも特に影響を受けた出会いが二つあります。

一つはゼミの中島先生に勧められ参加した日中韓交流での韓国人学生との出会い。もう一つは友人に誘われて始めた、チューター(留学生への日本語指導や生活の補助を行うもの)でのオランダ人留学生たちとの出会いです。

日本が好きで留学をしてきた彼らも、初めての日本での生活に多くの戸惑いがあったらうと思います。時にはオランダの甘いお菓子が食べたい、キムチが食べたいと話していたこともありました。しかし慣れない環境の中、彼らは日本語の上達のために努力を惜しまず、それどころか次々と留学生生活の中で楽しみを見出していました。

そんな彼らの姿に励まされ、異国情緒あふれる長崎での就職を望んでいたわたしは、公務員試験を乗り越え、大好きな地元で就職をすることができました。留学を終え、帰国した彼らとは、手紙やテレビ電話でのやりとりをしたり、また韓国を訪れた時には案内をしてもらったりと、交流を続けています。

社会人になり、失敗することも多々ありますが、その度にわたしは彼らの一生懸命な姿を思い出します。「言葉が通じる、毎日白飯とお味噌汁を食べることができると、こんな恵まれた環境にいるのだから、わたしはまだまだできるはず！」そう自分に言い聞かせて日々奮闘しています。

来春にはオランダ人の友人たちが再び留学にやってきます。今度はどんな楽しいことが起こるのか、今からとても楽しみです。

青春に乾杯

恵まれた時代

長崎市蚊焼町 林 寛

(昭和六十一年三月卒)

平成二十二年二月二十日(土)に社会科卒業生を中心とした同期会を長崎市内で行いました。

わたしたちが長崎大学教育学部に入学したのは、昭和五十八年、時はまさにバブルの絶頂期でした。当時、大学の講義よりも、サークル活動と友人たちとの交流(酒と麻雀)に熱心だったわたしは、当然ながら単位取得に時間がかかり、教養部の英語の四単位が最後まで取れず、留年がかかっていました。

年度末にその先生のご自宅まで電話をして可否をお尋ねしたことを覚えています。本当に失礼な学生でした。また、当時、長崎県の小学校の採用者数は二〇〇名(三〇〇名だった)と思います。今では考えられないことですが、わたしたちの先輩方も、わたしたちも就職で苦労する人はいませんでした。



その時代の恩恵にあずかり、何とか採用していただいたわたしたちも教員歴が二十年を超え、県内及び九州各県で、それぞれ活躍しています。正直にいうと、活躍しているかどうかは定かではありませんが、本人たちがそう思っているの、ここは信じたいと思います。

最後に一つ。決して勉強熱心だったわけではないわたしたちが社会人として、また教師として、今なんとかやれているのは、それぞれが学生時代から培っていたコミュニケーション能力のおかげであることは自信をもっています。

少し前から、学校では「生きる力の育成」がいわれています。その第一がコミュニケーション能力だと考えます。同級生たちは、各職場で、挨拶や正しい言葉遣いができる子どもを育てていることと思います。

長崎大学全学同窓会

「適度の貧乏」が人を育てる

長崎大学教育学部附属中学校 中島 清志

昨年十一月二十日、「第二回長崎大学ホームカミングデー」が開催されました。この中で、「はやぶさ」プロジェクトに深く関わってこられた、宇宙航空研究開発機構(JAXA)技術参与・名誉教授の川泰宣先生の講演会がありました。カプセル内の微粒子が、小惑星「イトカワ」のものであったという発表の直後ということもあり、興味深く拝聴しました。

先生は、スタッフの忍耐と執念、リーダーの卓越した統率力と決断力が、プロジェクトを成功に導いたことを、ユーモアを交えながら、分かりやすくお話しされました。そして、御自身の経験や今回のプロジェクトを通して感じたことをまとめて、次のようなメッセージをくださいました。

①「はやぶさ」が子どもたちに夢を与えたように、幼い頃の共感

と感動体験が未来をつくる。  
②小・中学校は高校への準備をするための時期ではなく、「命を輝かせる最も大切なセンス」を身につける時期である。  
③子どもたちにとっては、毎日毎日が人生で最も大切な瞬間である可能性がある。

④「着眼大局、着手小局」という言葉のとおり、目標を定め地道な努力をすることが大切である。  
⑤「適度な貧乏」の状態ならば、人は工夫をしてピンチを乗り越えようとする。

教育に携わる者の一人として、多くの貴重なヒントを頂いたよう気がしました。  
JAXAは、二〇〇三年に、宇宙科学研究所、航空宇宙技術研究所、宇宙開発事業団という三つの機関が、行政改革の一環として統合されて生まれた機関です。「はやぶさ」が宇宙に飛び立ったのもこの年です。組織改革という困難を乗り越えて、プロジェクトを成功させた偉業に思いを馳せるとき、「適度の貧乏」という言葉は、一段と輝きを増すのでした。

### 地区懇話会

### 感謝の気持ちで恩返し

南島原市立口之津小学校

中川典二



十一月二十七日に、南島原市口之津町にて、玉園同窓会、南島原支部の地区懇話会が開催されました。卒業して三十年、初めての案内に、大変楽しみに参加いたしました。

懇話会では、同窓会長の小川大天様から、これまでの同窓会の歩み、山路裕昭教育学部長様から、学部の実状等について説明がありました。大学運営費交付金の大幅削減や厳しい就職状況の中でも、長崎大学の教員就職率が、九州の他大学よりもずっと高いことが分かり、大学関係者や学生の皆さんが、伝統を大切にしながら努力されている賜だと感じました。

協議にあたって、南島原市立蒲河小学校長、西村仁志先生の素晴

らしい実践発表に続いて、本校が口之津中学校と取り組んでいる小中連携教育について発表しました。拙い発表にも関わらず、貴重な御意見や温かい励ましを戴きました。懇親会では、多くの先輩方から長崎大学への想いや昨今の教育問題等について、多くの話を聞くことができ、大変貴重で、楽しい時間を過ごすことができました。

今、自分があるのも、長崎大学教育学部で学ばせてもらったおかげです。感謝の気持ちを忘れず、恩返しの想いも込めて、なお一層学校運営に励んでいきたいと思えます。



### 一事一務一局一より

おしらせ

### 「長崎大学全学同窓会」開催される

### 「第2回長崎大学ホームカミングデー」

前号でお知らせしましたように、「長崎大学全学同窓会」(第二回長崎大学ホームカミングデー)が、平成二十二年十一月二十日(土)、長崎大学文教キャンパスにおいて開催されました。

各学部から、多くの会員の方の参加がありました。我が「玉園同窓会」からは三十一名の会員が参加しまし



た。

今回も、後輩たちの活気に満ちたアトラクション、元JAXA対外協力室長の川泰宣教授の「はやぶさ」についての講演、そして懇親会と、青春時代を謳歌した母校に集い、旧友との再会を喜び合い、さらに絆を深めた一日となりました。

### ともに 終身会員として

今年三月、輝かしい業績を残し、同僚の方々や保護者・地域の方々に惜しまれながら、教育界に一応の一区切りをなさる会員の皆様、本当に御苦労様でした。

本同窓会では、退職後も終身会員として、終身にわたり、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

つきましては、御希望の方は、入会の手続きをよろしくお願いいたします。

- (1)入会費 五千円(終身にわたって、会報を送付します)
- (2)振込用紙 事務局へ連絡してください。